芝浦工業大学　工学部　建築工学科
2000年度卒業研究梗概集 K00-126

澪東綺譚

k97039　門田友里

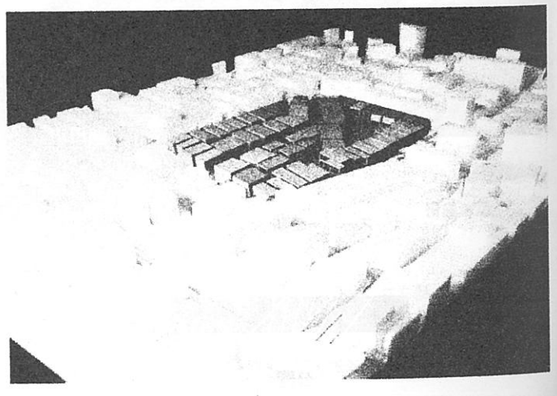
＜零＞現状と展望

90年代は、まちづくりへの住民参加の時代といって良い。政治的・社会的状況変化のもとで住民意識の変革が進み、まちづくりワークショップなど参加の方法と技術が発展し普及した＊1。このような時代背景の中、墨田区向島においても、住民主体でまちづくりの議論が本格化し、数々の問題提起と改善策の提案が行われた。この地域に興味を持つ若い芸術家、建築家、留学生、まちづくりの専門家が様々な発表会やワークショップを行い、「増加している空地や空家をこれからどうするのか、子供達や若い人々にとって、より魅力的な場所にするのにはどうしたらよいか」という課題の議論を煮詰めていった。その中で住民から街並みの保存と地域活性化への積極的な提案が挙がった。そのなかには実現可能かつ、地域的、全国的ネットワークを生む契機となる提案も含まれていた。卒業設計は、それらの提案を包含することを前提に、リノベーションを組み込んだ複合計画を試みるものである。

＜壱＞路地

向島地区の玉の井は大正末期から昭和二十年頃まで遊郭街であった。路地が迷路のように入り組み、その用途から形状へと落とし込まれた痕跡は今でも町の道や建築物に見ることができる。この用途から現れた形状はまさにこの地域の歴史であり、その路地、あるいは建築空間こそがこの地域での住民間のネットワーク構成の基盤である。

既存の路地を敷地内の主動線とし、建築群の間隙から派生する通路へと動線を広げる。新たに編込まれる通路は、この複合計画において点として置かれる多様な機能(ネットワークの要素)を円滑に地域住民と繋ぎ合わせるのである。



指導教員　伊藤　洋子教授

＜弐＞三つの要素

ワークショップでの提案を選別し、玉の井を起点とするネットワークの要素を地域活性化の点刺激として投下する。三要素は独立する事なく相互に絡み合い、路地の迷路性を際立てる。

要素１、「永井荷風記念館」

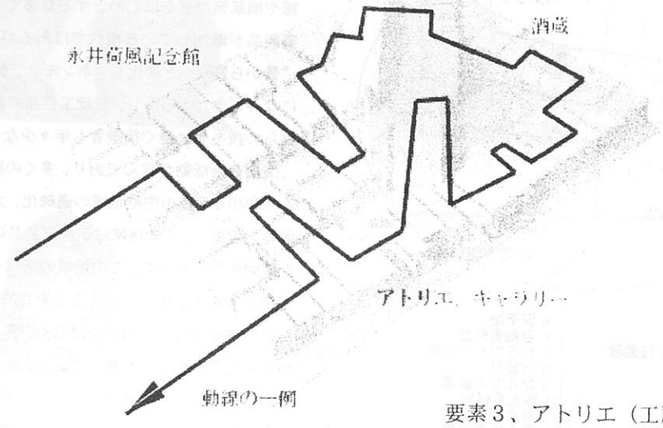
この番地のあたりは盛場では西北の隅に寄ったところで、目抜きの場所ではない。大正道路は殆軒並銘酒屋＊２になってしまい、通行人は白昼でも袖を引かれて帽子を奪われるようになったので、警察署の取り締まりが厳しくなり、車の通る表通りから路地の内へと引き込まされた。

—『澪東綺譚』永井荷風

永井荷風は小説「澪東綺譚」を書き、玉の井の当時の風情を美しく描写している。その代表作の舞台に記念館をつくり、地域活性化の一つの要素とする。意図は文化としての路地の記憶をとどめる事にある。

要素２、全国ブランド日本酒「玉の井」

玉の井という地名は全国に二十七ケ所あり、同名地域間でネットワークを形成して行こうという活動も興っている。その中には酒造りが盛んな場所があり、酒を媒体とした交流を行える。これはあくまでも住民の声による提案である。



ダイアグラム

要素３、アトリエ（工房）、ギャラリー

近隣住民間のネットワークの媒体としてアトリエギャラリーを設ける。

＜参＞澪東計画

この計画の主題を「澪東綺譚」としたのは、玉の井をその文化的価値から主張したかった為であり、地域住民の賛同も得ることが出来ると考えるからである。

既存の路地と、そこから派生する通路が混交し、過去の記憶を断片的に付加させながら魅惑的なラビリンスを形成する。此処に足を踏み入れた人々は、歴史を遡行すると同時に永井荷風の物語りの舞台へと迷い込んでゆく。

この設計は歴史と文化的背景を考察し、建築という枠組みの中で如何に構成できるかと試みたものである。

＊1：林泰義「建築雑誌」　日本建築学会　2000.10

＊2：国の認めない私娼街であるために表向きは居酒屋の形態をとった娼館のこと。ここでは、特殊飲食店のことをそう呼ぶ。